

「広島女学院大学」

ヴィジョンを高める  
海外ピーススタディ

宇根 治 ● 広島女学院大学学生課・国際交流センター課長

原爆の惨禍によって350名余りの学生・生徒と教職員を失った本学院にとって、平和に関するプログラムを継続していくことは、大切な使命である。本学では、1967年から50年以上連続と続く「原爆講座——8・6の意味するもの」が平和教育の組織的取り組みとして行われてきた。高齢化が進む被爆者の貴重な証言や平和関連のNPO関係者の話に耳を傾け、平和と核兵器について考える貴重な機会となっている。

毎年8月6日を中心とする3日間、本学において「キリスト教主義大学ジョイント8・6平和学習プログラム」が開催されている。西日本地区のキリスト教主義大学を中心に参加を呼びかけ、19回目の昨年は神戸女学院大学、松山東雲女子大学、福岡女学院大学、敬和学園大学ほか、短期大学2校に本学を加えた7校から29名が参加した。

内容は、被爆証言、平和記念公園と広島平和記念資料館見学、広島市の平和記念式典への参加、グループディスカッションから発表などへと続く。広島で生まれ育った学生にはおなじみの内容であるが、他県から参加した学生にとって（たとえ修学旅行などで訪れていたとしても）、このプログラムは強いインパクトとなって心に刻み込まれる経験となっている。

国際交流の一環としては、海外提携校の学生を招いて、隔年の6月と8月にピースセミナーを開催してきた。6月にはアメリカやフィリピンの提携校の学生を招き、合同ピースセミナープログラムとして、日本文化の体験や広島市内、宮島観光も織り交ぜながら、英語による平和プログラムを実施している。このプログラムの開始は1992年であるから、すでに25年以上の歴史がある。8月は長年の提携校であるアメリカのボーリング・グリーン州立大学（BGSU）の一行を招いてピースセミナーを実施している。英語による被爆体験の証言など、一連のイベントを踏まえて、ディスカッションによる熱い議論を交わしている。プログラムに盛り込まれている茶道や華道体験、浴衣の着付け体験は毎回好評であり、本学

の学生にとっても貴重な交流体験となっている。

近年、本学は受け入れるだけの平和学習ではなく、海外、特にアジア各国におけるスタディツアーを企画実施している。目覚ましい経済発展を遂げているアジア各国ではあるが、その経済的繁栄の蔭の部分に目を向けることによって、学生の心の中に変化を起こさせる試みである。

2011年に始まった「グローバル・ビレッジ・ワールド・エクスペリエンス」では、授業の一環として毎年8月にベトナムを訪れている。経済発展の中で都市と農村の相互依存関係が機能しなくなった実情を学び、豊かさの裏側にある矛盾を理解するプログラムを通じて、グローバル化ももたらす現実の問題を考える機会となっている。

さらに、2017年度からは「カンボジア・スタディツアー」が実施されるようになった。このプログラムは、キリスト教精神に基づいて開発援助や緊急支援を行っている国際的NGO「ワールド・ビジョン（以下、WV）」の協力で可能になったものである。わずか1週間とはいえ、その内容は濃密である。例えば、人身売買取引から救出された子どもたちを現地で支援する活動をしている

WVの拠点の視察

や、国立小児病院

におけるWVの医

療支援を学び、プ

ノンペンのスラム

街を歩きながら、

WVの現地におけ

る活動の詳細につ

いて説明を受ける

など、経済的自立

のための支援活動

の実態を経験的に

知る。

単なる海外留学

ではなく、このような「海外フィールドワーク」が学生の心と与えるインパクトは測り知れない。現地の人々とのふれ合いを通して、参加した学生それぞれの心の中に問題意識が形成されていくことを私たちは実感する。今後も、被爆地にある大学として、世界の危機的問題に一層深く関われるよう意識を高めることができればと願うものである。



2018年度「カンボジア・スタディツアー」

「恵泉女学園大学」

## タイ長期フィールドスタディで、

## 自分が変わる

グローバル市民を育てる

—— 汝の光を輝かせ ——

押山 正紀

● 恵泉女学園大学  
フィールドスタディインストラクター

## はじめに

恵泉女学園大学では、学園創始者である河井道の教育理念「キリスト教信仰に基づき、神と人とに仕え、自然を慈しみ、世界に心を開き、平和の実現のために貢献できる女性を育成する」を実践的に発展させるものとして、担当教員の専門地域を学期休みに1〜2週間訪問する短期フィールドスタディが1999年度にスタート。さらに、秋学期の約5カ月間、協定校であるタイ国立チェンマイ大学でタイ語と現地講義を受講し、NGOや政府機関、村の住民組織などにおいて学生の関心テーマに基づ

く体験学習を行うタイ長期フィールドスタディ（以下、タイ長期FS）を2000年度から実施している。

他大学にはないユニークなこのプログラムは、2006年度、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に選定され、2013年度から日本学生支援機構の「海外留学支援制度」にも採択され、2018年12月には文部科学省の「インターンシップ表彰」で選考委員会特別賞を受賞した。

## 1 タイ長期FSプログラムの概要

学生は春学期にタイ長期FSの事前授業を履修し、8月にタイに出发する。チェンマイ大学でタイ語、課外授業を通してタイ事情、タイの社会問題を学び、農村ホームステイやNGO訪問後、体験学習先を決める。10〜12月の間を3期に分けて体験学習を実施し、各期の終了後に学生はチェンマイ大学に戻り、報告を行い、12月上旬にはレポートを執筆し帰国する。体験学習の学びを日々の生活で活用、発展させていくために、翌年度の春学期には現場における包括的な学びを振り返る事後授業を行い、体験を通して現場から学ぶことを体系化している。

## 2 タイ長期F Sの学び

タイ長期F Sでは、タイ語や関心のあるテーマに関する理解、プレゼンテーションのコツやレポートのまとめ方などの客観的知識を修得するだけではない。プログラムへの参加から、テーマや体験学習先の決定、体験学習先での人間関係の作り方や体験学習のあり方に至るまで、自分で考えて決める自己決定力や、それに責任を持ち行動する行動力、長時間、試行錯誤しながらも諦めない忍耐力、どんな環境でも生活できる適応力、誰ともも協働できるコミュニケーション力、さらに自分との対話の積み重ねを通して培われる自己省察力を鍛え、育んでいる。これらは、グローバル市民の資質として必要不可欠なものである。



学生は自らの実体験やほかの参加メンバーの体験を共有することにより、「社会

を変えるのは大変で簡単なことではないが、何もしなければ良くなることはない。一歩ずつでも社会を変えるために自分が動く」、「やりたいことが明確になった」、「自分のものさしを見つけた」、「目の前にあることを一生懸命やるのが大事で、道が開ける。失敗は修正すればいいから悪いことではない」、「先のことばかり考えて頭でっかちだったが、とりあえずの精神で動けるようになった」といった、座学だけでは得られない「自分が他者と共に幸せに生きる力」も修得している。このように、人はいかにあるべきか、それを全うするために職場、地域、家庭、どこにあっても自分の存在価値を見つけ、実践し、輝き続けている卒業生たちのタイ長期F S後の進路選択や学びの成果については、タイ長期F S 15周年を記念して出版した『タイで学んだ女子大生たち——長期F Sで生き方が変わる』（コモンズ、2016年）を参考にしていただきたい。

最後に、学生の生き方をも変える原動力となった体験学習先の機関や村の人々に感謝するとともに、学生の一方的な学びだけにならないよう、今後受け入れ先と継続的につながり、協働しながら学生主体の能動的な学びのサポートを発展させていきたいと考えている。

## 「皇學館大学」

## 伊勢から世界へ、世界から伊勢へ

## ——「伊勢」と日本スタディプログラム

玉田 功

● 皇學館大学学生支援部国際交流担当主幹

## 1 プログラム実施の経緯

「伊勢」と日本スタディプログラムは伊勢市との協働による外国人短期留学生招聘事業であり、2012年に計画された。同市は2011年に国際化推進の指針を打ち出したものの、同年に伊勢を訪れた外国人（同市観光統計「神宮参拝者数」による）は約2・6万人と全体の0・3%程度にとどまっており、特に欧米における伊勢の認知度は低いと分析されていた。欧米圏に対して効果的な手段でPRし、インバウンド客の増加に結び付けたい同市と、外国人留学生の在籍率が常に0・7%前後を推移し、東アジアからの受け入れに偏っていた本学との思惑が合致した結果、本プログラムは2014年春に第1回を実施する運びとなった。

## 2 プログラムの概要

本プログラムは毎年2月下旬から3週間にわたって実施され、14名程度の参加者（日本学を専攻する海外大学院在籍者、若手研究者など）を受け入れている。参加要件として、本学は日本語による講義が理解できることを求め、伊勢市は伊勢に関する情報をSNSやブログで母語もしくは英語により毎日、発信することとしている。

参加者に対する支援としては、本学がカリキュラムや各種施設を提供し、同市は渡航費や滞在費を負担している。カリキュラムは「神宮の歴史」「神道と武士道」「伊勢の民俗・風俗」などの各種座学のほか、「神道の祭式行事作法」「茶道と日本文化」などの体験型学習、神宮をはじめとする市内の歴史地区や参宮街道を訪ねる実地学習によって編成されている。プログラムの最後には参加者による公開型成果発表会が開催され、同市民らも来場する。

## 3 プログラムの成果

本年春で6回を数え、これまでに25カ国から80名を受け入れてきた。地域別に見ると欧州からの受け入れが最

も多く60名、次いで北米の10名、アジアの7名と続く。初来日の参加者は29名、うち9名はその後日本で長期留学を果たしている。現在、本国などで日本学の研究職（ポスドク含む）に就いている者は25名に達する。

情報発信の効果分析は難しいが、2015年にスペインからの参加者が神仏習合についてスペイン語で発信したページには、1万件超のアクセスが記録された。また、実地学習先である神宮と関係のある伝統工芸業の経営者は、「本プログラムのおかげで、海外からの問い合わせが毎年増加している」と話す。実地学習では案内・解説を現地ガイドに委託することが多いが、NPO法人「神社かみやしろみなとまち再生グループ」の中村清理事長は「神社はかつて船参宮で栄えたが、人口減少著しく、年々衰退し、町の維持に苦慮している。そのような中、外国からの若者が日本人以上の熱心さをもって学習し、魅力を発信してくれる。これほどうれしいことはない」と述べている。参加者の一人（米国）は、後に「地域の歴史や民俗を後世に伝承しよう」と奮闘する地域住民の姿に感銘を受けた」と語っている。

本学の学生に与える影響も大きい。本プログラム参加者のサポーターとして毎年数十名が協力するが、学生からは「参加者の皆さんから刺激を受け続けた。日本や地

元のことについて逆に教わることも多く、自国のことを知らなくては真のグローバル人材になれないことを学んだ」との声が毎回聞かれる。

#### 4 現状と展望

2018年の神宮の外国人参拝者は、全体の1・2%程度、約10・1万人に伸びた。この間、国際的認知度の高い神宮の式年遷宮や伊勢志摩サミット、また伊勢市による在英国日本大使館や米国・南カリフォルニア大学との海外情報発信に関する連携事業等が行われてきた。同市の調査（2018年）によると、初来日で伊勢を訪れた観光客の地域別割合は、欧米が38%、東アジアは8%となっており、英米を中心とした欧米への情報発信の効果が表われつつあると分析されている。

国際交流の意義は、諸外国の文化を通して自己や自国の文化をより深く知ることにある。本プログラムが神道学研究・学習の国際発信の場として定着し、また伊勢の地においてそれぞれが依って立つ地域（ローカリズム）、世界（インターナショナルリズム）、地球（グローバルリズム）について学び合う草の根交流が地域の活性化に少しでも貢献することを願って結びとする。